

佐伯史談

第七十七号

「鄉土史研究」誌
通算七十九号

昭和四十四年十月廿五日

佐伯史談會

事務所
佐伯市大字稻垣字龍饒寺
井岩方

佐伯文化会館への期待

一 御殿は大事に考えよう

法伯史談會
副會長

羽
柴

弘

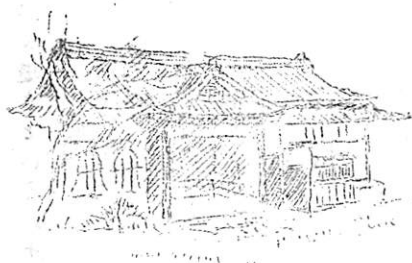
佐伯市に於ける池田市段は、五万市民多年の要望に依
て、その市民会館を、広域行政の立場から郡部八カ所
村の協力を得て、三の丸に新らし
く文化会館を建設することとす

つた

昭和四十五年度着工、二千万
で完成、総工費二億五千万圓、
鉄筋四階建。

一階はロビー、展示場、二百二十席の集会室をはじめ大小数個の集会室と控室、それに結核式場に調理室、食堂もあつて一級の利用は出来るといふ。

二階三階は大ホール、正面壁
台下向つて千数百人の座席をも



つ大集会場、講演会や演劇、歌謡ショーなどが行われる
由であるが、以上はまたほんの排舞の程度で、設計はこ
れからであるといふ。

て裏にたない。

と云ふがその建設の場所が三ノ丸といふことである。以前、徳川幕府の建物の場所が三ノ丸の下で、佐田小學校の前、元那役所の建物のある一帯を毛利家から譲り受けてといふことであつた。

本号内容

の 炭田文化会館へ入期寄（井柴弘）一

三の丸御殿についで（小野栄治）……

。佐伯教育の揺籃時代（明治初期の学校教育）（中後、武蔵）

石川氏等と左明（山本保）……

主權文書に以る西面戰爭（帝矢勘蔵）二

「會部」
「德部中大目控帳」

目 卷 (市野海行)

西云入夏長魚將小動

佐伯史談の題字につて

性何新聞を係存せしむ

集會與內贊出官

ところが三八丸下に
個人住宅があり、俄

かに立退きというわけにも参らぬ事情もあり、止むなく文化会館の建設を三の丸に、そして三の丸下には図書館や働く青少年の家をはじめ、公共施設を次々とつくる、そして文化会館をはじめとする集会のための駐車場を——ということである。

だが気になることがいくつもある。その第一は三の丸の旧城内という歴史的な地を、まじい中では、あの物許で、幾層の奥のこもる泉水や森林に、四階建鉄筋コンクリートの高さの建物、うまく調和するだろうか。これは設計担当の方の手腕にまかせなければならないが、三の丸は何と云っても佐伯市のひとつ屈指の史跡である。佐伯鶴屋城は石垣も残っている山頂城址と共に、この三の丸にその面影を留めているのであるから、城跡としての雰囲気、明治以来一般に開放されて百年間市民に親しまれて来た三の丸のイメージを、こわさないものであつてほしい。

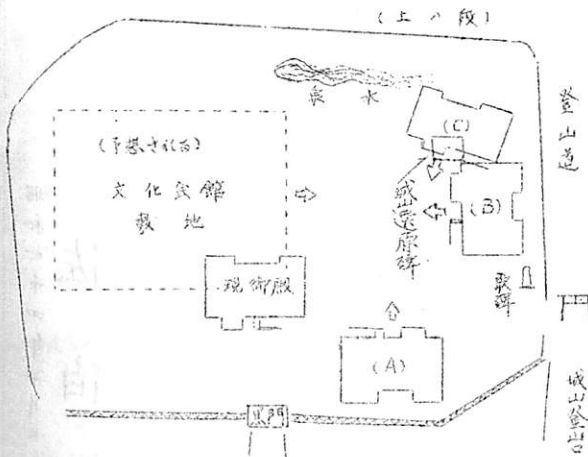
第二はその建築設計にとりあげられる内容施設で、これについては先進都市の文化会館に倣つて、市長補佐、特に御上の産業や文化や伝統をここに集約し、外來者にも市民にも佐伯市の特長と誇示し、五万市民、いや郡部と含む広域佐伯人士の親愛するところとしてもらいたい。

第三に、これは一番大事なことであるが、現存の旧御殿をどうするかの問題である。

終戦後全国各地の都市で、「古城の復元建築」が盛んに行われ、本県でも中津城が出来、反対の声の高い杵築城もその計画が進んでいる。建てたことがあるかどうか怪しい天守閣まで復元される御時勢である。それは別としても、近頃の佐伯市や竹田市の如く、躍起となつて古城址の整備、保存に力を注いでいる。三の丸櫓門をくぐれば、すぐ正面に仰がれる大玄閣をもつ御殿、櫓や門はなくなり、あちこちに残っているが、藩政当時の政庁であつた御殿

の残存している例が、近隣どこにあるか。これほどこれまで残し、この際完全な修理を施して内部にも手を入れ、新築の文化会館の附属施設として市民に解放、活用の方途を講じていたきたい。

第四に新文化会館に対する旧御殿の位置である。今ある位置が三の丸の中央を占めているので、このままでは文化会館は建たない。他に移す外はないが三の丸構外は勿論駄目、ある一部の人達は既に三の丸と誤称している上の段をあげているが、それを建物を解体して移さねばならぬので無理である。次に掲げる略図(A)をあげている人があつたが、私は(B)又は(C)、(C)の方がよいと思ふ。いかと考へている。やはり黒門を入つてはるか彼方でもない、南向きの大玄閣御殿が見られる、やうあつてほしい。いかにかがなさいかあろう。



ともあれこれのこと、すべて佐伯市文化会館総工費二億数千円に上るは、設計の中で充分考慮されるべきで、いかに貴重にも上らない旧御殿を無視、或は除外しての文化会館であつても、いたくない。旧御殿の活用について、以後日改めて筆をとりたいと思つてゐる。

(おわり)